

CLOSE-UP
INTERVIEW

小説家・新聞記者

天津佳之さんに聞く

「聞き手」 脇浜紀子さん 京都産業大学現代社会学部教授

より良い明日のために
試行錯誤し生き抜いてきた
先人の思いを伝えていく

あまつ・よしゆき

1979年生まれ、静岡県伊東市出身。大正大学文学部日本語・日本文学科卒業。書店員、編集プロダクションのライターを経て、業界新聞記者。2020年、『利生の人 尊氏と正成』で第12回日経小説大賞を受賞し、デビュー。

3度目のチャレンジで 日経小説大賞を受賞

脇浜 本日お話を伺うのは、小説『利生の人 尊氏と正成』で第12回日経小説大賞を受賞された天津佳之さんです。よろしくお願いいたします。改めて、日経小説大賞の受賞、おめでとうございます。こちらの賞への応募は3度目だとお聞きました。

天津 ありがとうございます。この賞に関しては、初めて応募した小説が最終候補まで残ったこともあり、相性が良いのではないかと感じて、その後も連続して応募しました。今回3度目で受賞することができました。

脇浜 受賞されてからの、周囲の方の反応などはいかがですか。

天津 周りの方々には、大変喜んでいただいています。家族は「ようやくか」という感じだったようですが、多くの方々のご自身で読むだけでなく、友人、知人に薦めたり、プレゼントしてくださって草の根的に読者が増えている実感があり、とてもうれしく思っています。

脇浜 それはうれしいですね。具体的にはどのような感想

が寄せられているのでしょうか。

天津 今回描いた南北朝時代は、日本史の中でも難しいイメージがあると思います。それをわかりやすく、あのような形で表現できたことで、この時代のファンの方に喜んでいただけたということがありました。また、うれしかったのはビジネスマンの方々が、今、自分が携わっている仕事のモチベーションにつながったという感想です。日本経済新聞出版から出していただいたという点も大きく、日本経済新聞の読者であるビジネスマンの方々にも多く読んでいただいているようです。そういう方々が、教養書として読んでくれたり、歴史上の人物の生き方に共感してくれたりしていることを、とてもうれしく思っています。

脇浜 授賞式の座談会を拝見したのですが、この作品は通勤する電車の中で、スマートフォンで書かれていたそうですね。

天津 そうです。私は勤め人なので、作品を書くためのまとまった時間を確保することがなかなかできません。そうなる、あらゆる隙間時間があったいなく思えて。通勤時間はある程度まとまった時間を取れるため、最初は小さなワープロのようなものを利用して書いていました。その作業がだんだん

つらくなってきたため、スマートフォンで書いてみたら、意外にできるなど。現在は、エディターアプリを利用して書いています。最終的にはもちろんパソコンで仕上げています。

明日の皆を生かす 「利生」をテーマに

脇浜 小説のタイトル「利生の人」の「利生」という言葉は、あまり耳慣れない言葉ですが、改めて天津さんから、言葉の意味、そしてそれをタイトルにされた思いなどを聞かせただけですででしょうか。

天津 仏教用語の「利益衆生」という言葉がもともとの言葉です。仏や菩薩がご利益を生きとし生けるもの、つまり衆生にもたらすという意味です。皆が明日の皆を生かすために役割を果たしている、一人一人に何らかの本分があるという思いを伝えたいという意図もあり、利生という言葉が登場人物をつなげるフックとして採用しました。

脇浜 なるほど。非常にユニバーサルであり、今の世の中にもつながる考え方ですね。

天津 例えば仕事などでも、それを一生懸命やっていたり

無心で打ち込んだりしている時、人はとても生き生きしているはずですが、それが仏教でいう仏性なのではないかというのが、発想としてありました。人のそういう状態は、生き方そのものに対して

良いエネルギーがみなぎってくることにつながるのだと思います。そんなエネルギーがたくさん集まれば、社会は必然的に良くなるのではないかと。今というSDGsのような考え方にも通じていくのではないかと気がします。

脇浜 私は教員として学生と向き合っていますが、今の学生は自分の本分とか役割、まさに利生を探している人が多いような印象を受けます。

天津 そこがずっと見つかればよいですが、なかなか自分の本分を見つけることが難しいのが現実かもしれません。ただ、一人一人のかけがえのない役割が集まって、世の中を良くしていこうという考え方が、日本の歴史の中に理想としてあったのだらうということは、小説で描きたかった一つのテーマではあります。



天津 佳之さん

地名や風景から 歴史小説を楽しむ

脇浜 実は私はこのような歴史小説はあまり読んだことがなく、日本史を深く学ぶ機会もなかったので、最初は難しいという印象がありました。ただ、読み進めていくと京都、奈良、兵庫などの地名が多く描かれており、私が京都の大学に勤めていることもあって、非常に親しみを持つことができました。天津さんは小説の舞台になるところには、出かけたりもするのでしょうか。

天津 はい。できるだけ現地に取材に行くことを心掛けています。今回の小説でも京都五山や吉野、神戸の湊川などに足を運びました。フィールドワークは割としっかり行いたいタイプです。

脇浜 現地ではどんなことをされるのでしょうか。

天津 まずは、その土地の空気感を捉えたいという思いがあります。季節によって夏だったら、その場所は暑いのか涼しいのか、風はどちらの方向から吹いてくるのかなども物語に説得力を持たせる上では大切な情報です。例えば戦のシーンを描く際、その戦が旧暦の何月に行われて、その

頃のこの地域ではどのくらいの風が、どちらの方向から吹いてくるのかなどを描写に加えていくと、現実感が出てくるといえるか、物語の解像度がぐっと上がってきます。

脇浜 なるほど。わかるような気がします。

天津 地形やそこから何が見えるかも重要だと思っています。登場人物と同じ場所に立った時、周囲に何が見えるのだろうかというのは、登場人物や物語のシーンの骨格にもなります。その風景から、登場人物の思いや意識を内面の描写として描いていくという使い方もします。また、今回に関しては利生という言葉を自分の中に落とし込むために、京都五山にも行きました。

脇浜 禅にゆかりのあるお寺などですか。

天津 そうですね。そこで座禅を組んだりはしませんでしたが、禅寺の庭を見て、そこで何が感じられるのかは捉えておきたいなという思いがありました。例えば天龍寺は、足利尊氏とその弟が後醍醐天皇の慰霊のために夢窓疎石を開山として創建



脇浜 紀子さん

した禅寺で、そこには今でも大切に後醍醐天皇の木像が祭られています。そこに立ち、後醍醐天皇の木像と対峙することで、足利兄弟の後醍醐天皇に対する気持ちや、実感として伝わってくるわけです。

脇浜 特に思い入れのある場所、好きな場所がありますか。

天津 やはり足利尊氏の墓がある等持院でしょうか。お寺自体は立命館大学衣笠キャンパスの裏手にあります。ちよつど書くのに行き詰まった時期に行ったのですが、本堂の修復工事中で、全く人がいませんでした。お墓の前でしばらくの間「こんな風に描きたいのですが、大丈夫ですか」と心の中で問いかけていました。

格好良い楠木正成

武将としての魅力と

印象的な小説の場面

脇浜 京都のお話がたくさん出てきましたが、私は神戸生まれの神戸育ちで、湊川のあたりで生まれ育ちました。

天津 そうだったんですね。

脇浜 はい。楠公なんこうは、子どもの頃から馴染みがあり「楠公

さんに行こう」と湊川神社にもよく行っていました。ですから、小説の中で、楠木正成を非常に格好良く描いていただいて、お礼を言いたいと思っていました。

天津 私は大阪の茨木市在住なのですが、楠公さんに地縁のある場所なのです。JR京都線沿線では、茨木に館があつたと伝えられていますし、島本駅近くの桜井駅跡には、楠木正成と嫡男の正行と今生の別れを描いたとされる桜井の別れの銅像もあります。土地とのご縁も感じますし、好きな武将の一人でもあつたため、正成を格好良く描きたいという思いは強くありました。

脇浜 会下山えげやまも幼い頃からお花見に出かけたりした馴染み深い場所です。ですから湊川の合戦のシーンなどは、読みながらちよつとした坂道の感じなども実感としてわかり、戦の描写も目に浮かぶようでした。湊川の戦いは有名な合戦ですが、こうした戦いにおける陣形図のようなものは、多く残されているものなのでしょうか。

天津 残っているというよりは、いろいろな人が書き起こしていると言った方がいいでしょうか。どちらの兵がどこにいて、どう動いたかを現在の地図に当てはめたり、実際に人が動いた結果、史実に残っていることにどうつながったのかな



どを考察している人も多い。楠公さんの戦いは見栄えがするので、研究対象としてもとても面白いのだと思います。

脇浜 合戦シーンはもちろん、小説の中では楠公の焼き飯の宴のシーンも印象的でした。

天津 玄米を炒って一晩水に浸けてから炊く楠公飯は、楠木正成が考えた料理と伝えられています。事実かどうか定かではありませんが、その日に食べられないものを、明日の皆のために仕込むというロマンを描きたいという思いもあり、明日の皆を生かす理念の象徴としての意味を持たせています。歴史的に、また著名な大作からイメージされる人物像が尊氏にも正成にもありますが、新たな人物像として描きたいとの思いもありました。

脇浜 玄米が爆ぜてくる情景などがリアルに浮かんできますが、あのような描写はどのように研ぎ澄まされてきたのでしょうか。

天津 楠公飯を実際に作りました。私は友人とルームシェアをしているのですが、その中の一人が作り方を知っていると知っています。そこで実際に作ってもらい、その工程を観察していただきました。結構時間がかかるんだとか、玄

米を炒っているうちに、音や香りがこんな風に変わっていくのか、など自分の五感で確かめたというのは大きいです。その上で、シーンにどのような印象を持たせるか、構成と演出を考えていきました。皆の明日を良くしたいと考える人が、明日、皆で食べるためのものを大切に仕込んでいくという過程を印象的に描き、物語に仕込んで読む人の記憶に残す仕掛けを作るためには、言葉の選び方や方法論、例えなどにも気を使いました。

脇浜 私はその仕掛けにまんまとはまり、あのシーンでは涙が止まらなくなりました。活字でも十分楽しませていただきましたが、情緒漂う登場人物の息遣いを、映像でも見てみたいという思いに駆られました。

書くことの支えになる 仲間に出会えた学生時代

脇浜 大学時報という媒体ですので、大学時代のことについてもお伺いしたいと思います。大正大学文学部日本語・日本文学科をご卒業されていますね。

天津 大正大学は総合仏教大学です。キャンパスのいろいろ



きる仲間と出会えたことは大きかったですね。

脇浜 サークルや同人誌などに参加されていたのですか。

天津 文芸部などに入っている友人もいましたが、私は参加していませんでした。ただ、小説を書く仲間とリレー小説を書いたり、自分の書いたものが人の目に触れて評価されるという経験をそこで初めてしました。「お前の小説うまいな」と言ってくれる仲間がいて、本気になったところがあります。「いずれはプロになる」と言ってくれる友人もいて、その言葉はずっと支えでした。

脇浜 お互いに刺激し合えて、支えになるような言葉をか

ろなところに仏像が置いてあったり、図書館には仏教関係の本が充実していたりしたのは、他大学と異なる面白いところでした。また、大学生になるまでは自分のように小説を書く人間は周囲にいませんでしたが、大学では、多くの書く仲間に出会うことができました。そういった切磋琢磨でした。

けてくれる友人ができたかけがえない時間を過ごされたのですね。小説は15歳から書き始め、ライトノベルを長いこと書かれていたとお聞きしました。今回のような歴史小説を書こうと思ったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

天津 ライトノベルを書くのが年齢的に厳しくなってきたと感じた頃、知り合いに「これまでは、自分が書きたいことを書いていただろう」と指摘されました。「自分が書きたいことというのは、究極を言うところでは自分一人だけだ」と。

脇浜 なるほど。

天津 その人には「これからは、書かなければならないことを書いてみたらどうか」と言われたのです。

脇浜 「書きたいこと」ではなく「書かなければならないこと」ですか。

天津 自分にとって書かなければならないことについて考えた時、歴史ということが浮かびました。今の時代、そしてこれからの時代に必要なことは何かと考える時には、過去のことを知る必要があります。日本という国がどうあるべきか、ということは先人たちも一生懸命に試行錯誤してきたはずなんです。それを読み解き、今の時代に通じる形で伝えていくことは、自分の小説の役割にもなるのではない

かと考えました。

脇浜 まさに、一人一人に本分があり、それを果たしているというところを天津さんはご自分の小説を通して果たされているんですね。

時代の転換期に目を向け 人の思いや営みを作品に

脇浜 今回お話を伺って『利生の人 尊氏と正成』に関しても、再読したいと思うシーンがいくつもあり、楽しさが増えました。次作についても気になるところですが、もう構想はあるのでしょうか。

天津 次作では、推古天皇について書いています。飛鳥時代は不思議な時代で、文字記録がなく、ある種神話的なファンタジーのように捉えられがちなのですが、その時代が終わると『古事記』や『日本書紀』が登場して、急に現実的な歴史になるのです。そんな神話と歴史の過渡期を、不可思議な古代ロマンではなく歴史として、当時の人の営みや、聖徳太子の「和」という考え方があり、その考えが今にも通じているんだということを書いてみたいと思いました。

脇浜 少し不思議なイメージで捉えられている時代ですね。

天津 まだ、神様という感覚が残っている時代です。資料が少ないため、難しい部分もありますが、いろいろな角度から見ると、政治体制も古代のものから律令政治に変わっていく過渡期であり、ダイナミックな動きもあります。そこで「和」という哲学がどうして生まれてきたのかというあたりを描いていけたら面白いなと考えています。

脇浜 面白そうですね。今からとても楽しみです。お話を伺っていると、天津さんは歴史の中での何らかの変わり目に興味をお持ちなのではと感じました。

天津 歴史の転換期や新たな文化が誕生してくるところに興味があります。例えば、菅原道真が遣唐使を廃止し、中国から文化が入ってくることで途絶えたことから、平安時代の雅な国風文化が生まれました。そのあたりも面白く、以前に菅原道真を描いた作品も書きました。また、幕末にひたすら近代化を進めてきた佐賀藩にも興味があります。

脇浜 まだまだ書かなければならないことは、たくさんありそうですね。本日は南北朝に始まり、飛鳥時代からこれからのお話までたっぷりとお聞かせいただき、ありがとうございました。